

氏 名	李 翠芳
氏 名	LEE, CHOOI FONG
学 位 の 種 類	博 士 (学術)
学 位 記 番 号	甲 第 2 5 1 号
学位授与年月日	2 0 2 5 年 3 月 2 5 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	Maternal Self-Discrepancy and Subjective Well-Being: A Study of Middle-Aged Japanese Mothers Across Employment Status 母親の現実自己と理想自己の不一致と主観的幸福感について —就業形態における中年期の日本人母親を対象とした研究—
論 文 審 査 委 員	主 査 上級准教授 直 井 望 副 査 特 任 教 授 森 島 泰 則 副 査 教 授 西 村 馨

論文内容の要旨

本論文は、日本の中年期の母親における理想自己と現実自己との乖離が個人の心理的健康に及ぼす影響を検討することを目的とするものである。

母親の心理的健康については、育児への不安、家族形態、就業形態、また社会的支援の有無などの要因の観点から多くの研究がなされてきた。しかし、これまでの研究の多くは年少の子どもを持つ若年層の母親を対象としており、中年期の母親に関する研究は十分に行われていない。中年期の母親は、子どもの成長や独立に伴う親としての役割の変化、仕事上のキャリアの変化、老親の介護といったライフイベントに直面する時期である。このような人生の転機において、中年期の母親が持つ理想とする自己像が変化する可能性が考えられる。

Higgins (1989)は、理想自己には「自分がこうありたい」と願う自身の理想自己(ideal self)と、個人にとって重要な他者から期待される他者視点の理想自己があるとした。また、理想自己や他者視点の理想自己が、自分が現実「こうである」と認識している現実自己 (actual self)と乖離している場合、否定的感情が引き起こされ、心理的な不適応状態につながるとする自己不一致理論(Self-Discrepancy Theory)を提唱した。

自己不一致理論を用いた先行研究では、成人期における他者視点の理想自己と現実自己との乖離が自尊感情に及ぼす影響について検討されており、その結果、他者視点の理想自己と現実自己の乖離は母親の自尊感情とネガティブに関連し、またその影響は母親の就業形態によって異なることが報告されている(松岡他, 2006)。このことから、母親の心理的健康は、配偶者や子ども、両親などから期待される母親像の影響を受ける可能性が示唆されるが、母親自身が抱く理想自己と現実自己との乖離の影響については検討されていない。また、中年期の母親がどのような理想自己や他者視点の理想自己を持ち、それらが就業形態によってどのように異なるのか、さらに理想自己と現実自己との不一致の程度が母親の心理的健康にどのような影響を与えるのかについては明らかになっていない。

そこで、本論文では、中年期の母親の理想自己および他者視点の理想自己の概念を検討し、それぞれと

現実自己との乖離が、心理的健康（母親役割の達成感、状態不安および特性不安、および主観的幸福感）に与える影響を分析した。また、就業形態がこれらの関係に与える影響についても検討した。

本論文は予備的研究を含む3つの研究から構成される。予備的研究は、研究1と研究2で使用する自己記述式質問紙の妥当性を確認するために行われた。研究1は、日本の大学生の子どもを持つ中年期の母親がどのような理想自己・他者視点の理想自己を抱いているのかを検討した。この研究には120名が参加した。予備的研究において妥当性が確認された質問紙を用い、理想自己と他者視点（配偶者、子ども、両親、社会）の理想自己をそれぞれ3つ自由記述し、それらの現実自己との乖離を7段階で評価してもらった。自由記述による理想自己および他者視点の理想自己について、就業形態別にテキスト分析を実施した。KH Coder (樋口, 2020)を用いた頻度抽出、階層型クラスター分析、共起ネットワーク分析の結果、母親の就業形態によって理想自己の構成が異なることが示された。正規雇用の母親では、「子ども」や「母親」という単語が理想自己として顕著に生起し、「家族」や「仕事と生活のバランス」に関連する理想自己が多く挙げられた。非正規雇用の母親では、「母親」や「家族」のほか、「自己」や「人生を楽しむ」といった要素も多く挙げられていた。家庭専業の母親では、「子ども」や「家族」のほか、「自己」、「人間関係」、「コミュニケーション」に関する記述が顕著であった。カイ二乗検定の結果、就業形態ごとに理想自己に含まれる母親役割、家族役割、自己役割に関連する単語の出現頻度に有意差があった。特に、母親役割を理想自己として挙げる頻度は正規雇用および非正規雇用の母親で有意に高く、自己役割を挙げる頻度は家庭専業で有意に高かった。

他者視点からの理想自己については、仕事を持つことに関して、母親の両親や配偶者から期待される理想が強く反映されていることが示唆された。正規雇用の母親は「仕事を持つこと」、「自立していること」、「夫を支えること」を他者視点の理想自己として挙げた。非正規雇用の母親においても類似した他者視点の理想自己が挙げられたが、自身の理想自己には「仕事を持つこと」は含まれておらず、「親に頼らない」といった両親からの期待が多く見られた。家庭専業の母親では、他者視点の理想自己には「仕事」に関連する要素は含まれなかった。カイ二乗検定の結果、配偶者から期待される理想自己に含まれる家族役割の出現頻度に有意差があり、「夫を支える」などの家族役割を挙げる頻度は非正規雇用の母親において有意に高かった。

研究2では、中年期の母親の理想自己・他者視点の理想自己と現実自己との不一致の程度が、心理的健康（母親役割の達成感、状態不安および特性不安、および主観的幸福感）に与える影響について検討した。研究の対象者は284名であった。一要因分散分析の結果から、理想自己・他者視点の理想自己と現実自己との不一致スコアに、就業形態による有意差はなかった。また、母親役割の達成感スコアや状態・特性不安スコアにおいても就業形態による有意差は認められなかった。一方、主観的幸福感スコアは正規雇用の母親が非正規雇用の母親より有意に高かった。階層的重回帰分析の結果、現実自己と理想自己の不一致スコアが、すべての就業形態において母親の主観的幸福感を有意に予測することが明らかになった。

結論においては研究1と研究2の知見が総合的に考察された。日本の中年期の母親が持つ理想自己と他者視点の理想自己の構成要素は就業形態によって異なり、個人の理想自己と現実自己との不一致は母親の主観的幸福感に影響を及ぼすことが示唆され、その機序が考察された。また、母親の心理的健康を考慮する際は、就業形態だけでなくどのような理想自己と他者視点の理想自己を母親が有し、それと現実の自己観の乖離の影響を考慮する必要があることが議論された。

論文審査結果の要旨

本学位論文の公開発表はZoom によるオンラインで開催され、2025 年 1月16日16時30分から質疑応答を含む1時間行われた。公開発表には3名の委員他、教員、学生、大学院生10名程度が参加した。質疑応答では大学院生を含む聴講者からの質問が多く挙げられ活発な議論がなされた。公開発表に続いて、委員との口頭試問がおおよそ1時間行われた。 審査結果の詳細を以下に示す。

本論文は、日本の中年期の母親における理想自己と現実自己との乖離が、母親の心理的健康に与える影響を検討することを目的としたものである。これまで行われてきた研究の多くが若年層の母親を対象としていたのに対し、本論文は中年期の母親に焦点を当て、就業形態との関連についても検討を行った。

Higgins (1989) の自己不一致理論を基に、研究1において母親が「こうなりたい」と考える理想自己および子ども、配偶者、両親および社会など他者から「こうであってほしい」と期待される他者視点の理想自己について、母親が自由記述によって挙げた理想自己をテキスト分析することによって検討した。その結果、母親の就業形態により理想自己の構成が異なることが示唆された。これまでの研究においては、理想自己と現実自己との乖離の程度と自尊感情等の心理的指標との関連が分析されてきた。しかし、母親がどのような理想自己を抱くかには個人差があり、またその理想自己像には個人にとって重要な他者からの期待や社会的要因が影響することが考えられる。本論文は、母親の抱く理想自己を母親自身によって自由に記述してもらい、そのテキストを分析することによって理想自己・他者視点の理想自己の構成について分析した点で新規性が認められる。さらに、母親が抱く理想自己が就業形態によって異なり、母親の配偶者と両親からの影響を受けることが示唆された点で重学術的意義がある。

研究2においては、理想自己と現実自己との乖離が母親の心理的健康（母親役割の達成感、状態・特性不安、および主観的幸福感）に及ぼす影響を統計的に分析した。結果から、正規雇用の母親において非正規雇用の母親と比較して有意に高い主観的幸福感を示すことが明らかになった。また、就業形態にかかわらず、母親自身の理想自己と現実自己の乖離の程度が主観的幸福感の低下を予測することが明らかとなった。

母親の主観的幸福感は母親自身の理想自己と現実との乖離と関連することが示唆されたことから、母親の心理的健康を考慮する際に単に就業形態のみに着目するのではなく、母親自身の理想の自己像とその現実における実現度との乖離を評価することの重要性を示した。これらの知見は、これまで十分に注目されてこなかった中年期の母親が直面する心理的課題の理解や適切な社会的支援の検討に貢献する基礎的知見を提供している点で高く評価できる。以上の理由から、論文審査委員は全員一致して、李翠芳さんの論文は学位授与にふさわしいものであると評価した。

Summary of Doctoral Dissertation

This dissertation examined the effect of the discrepancy between ideal self and actual self on the psychological well-being of middle-aged mothers in Japan. Extensive research has been conducted on maternal psychological well-being from various perspectives, including parenting anxiety, family structure, employment status, and the presence of social support. However, the majority of previous studies have primarily focused on young mothers with young children, while research on middle-aged mothers remains insufficient. Middle-aged mothers undergo significant life transitions, such as shifts in their parental role as their children mature and become independence, career changes, and caregiving responsibilities for aging parents. Given these life events, it is plausible that the ideal self-image held by middle-aged mothers also changes over time.

Higgins (1989) proposed that the ideal self comprises two dimensions: an individual's personally desired ideal self and the ideal self as perceived from the perspective of significant others. He further introduced the Self-Discrepancy Theory, which postulates that when individuals perceive a discrepancy between their ideal self or the ideal self expected by others and their actual self, they experience negative emotions, potentially leading to psychological maladjustment.

A previous study employing Self-Discrepancy Theory (Higgins, 1989) investigated the effect of the discrepancy between the ideal self as perceived by others and the actual self on self-esteem in adulthood. This study reported that such a discrepancy is negatively associated with mothers' self-esteem and that this effect varies depending on their employment status (Matsuoka et al., 2006). These findings suggest that maternal psychological well-being may be influenced by the expectations of their spouse, children, and parents. However, the impact of the discrepancy between mothers' personally held ideal self and their actual self has not been explored. Furthermore, it remains unclear what kind of ideal self and ideal self from others' perspectives middle-aged mothers hold, how these differ depending on employment status, and how the magnitude of the discrepancy between the ideal self and actual self affects their psychological well-being.

Therefore, this dissertation examined the conceptualization of the ideal self and the ideal self from others' perspectives among middle-aged mothers and analyzed how their discrepancies with the actual self influence maternal psychological well-being, including fulfillment in the maternal role, state and trait anxiety, and subjective well-being. Additionally, the study investigated how mothers' employment status

affects these relationships.

This dissertation consists of three studies, including a preliminary study, and a concluding discussion. The preliminary study was conducted to assess the validity of the self-report questionnaires utilized in Studies 1 and 2. Study 1 explored the ideal self and the ideal self from others' perspectives among middle-aged mothers with university-aged children in Japan. A total of 120 participants were included. Using the validated questionnaire from the preliminary study, participants described three aspects of their ideal self and their ideal self from others' perspectives (spouse, children, parents, and society) and rated their discrepancies with the actual self on a 7-point scale. A text analysis of the ideal self and the ideal self from others' perspectives was conducted based on employment status using KH Coder (Higuchi, 2016), a software for quantitative content analysis. Frequency extraction, hierarchical cluster analysis, and co-occurrence network analysis revealed that the composition of the ideal self varied by employment status.

For mothers in full-time employment, the terms “children” and “mother” frequently appeared in descriptions of their ideal self, along with ideals related to “family” and “work-life balance.” Among mothers in part-time employment, in addition to “mother” and “family,” elements such as “self” and “enjoying life” were frequently mentioned. Stay-at-home mothers often mentioned “children” and “family” as well as concepts related to “self,” “relationships,” and “communication.” A chi-square test indicated significant differences in the frequency of terms related to maternal, family, and self-roles among employment groups. Specifically, full-time and part-time employed mothers incorporated maternal roles into their ideal self significantly more frequently, whereas stay-at-home mothers prioritized self-oriented roles significantly more frequently.

With regard to the ideal self from others' perspectives, findings suggest that parental and spousal expectations were strongly reflected in ideal selves related to employment. Full-time employed mothers identified “having a job,” “being independent,” and “supporting their husband” as key components of their ideal self from others' perspectives. While part-time employed mothers also reported similar expectations from others, their personally held ideal self did not include “having a job.” Instead, they frequently cited expectations such as “not relying on parents.” Among stay-at-home mothers, work-related aspects were absent from their ideal self from others' perspectives. A chi-square test showed a significant difference in the frequency of family role-related ideal selves expected by spouses, with non-regularly employed mothers significantly more frequently mentioning expectations such as “supporting

their husband.”

Study 2 examined the impact of the magnitude of discrepancy between the ideal self, the ideal self from others' perspectives, and the actual self on psychological well-being, including maternal role fulfillment, state and trait anxiety, and subjective well-being. Study 2 comprised 284 participants. One-way ANOVA results showed no significant differences in discrepancy scores between ideal self and actual self by employment status. There were also no significant differences in maternal role fulfillment scores or state-trait anxiety scores by employment status. However, subjective well-being scores were significantly higher among full-time employed mothers than among part-time employed mothers. Hierarchical multiple regression analysis revealed that the discrepancy between actual and ideal self significantly predicted subjective well-being across all employment statuses.

In the conclusion discussion, findings from Studies 1 and 2 were comprehensively discussed. The study suggests that the conceptualization of middle-aged mothers' ideal self and ideal self from others' perspectives varies by employment status and that the discrepancy between their personal ideal self and actual self significantly influences subjective well-being. The underlying mechanisms of these relationships were discussed. Furthermore, the discussion underscores the necessity of considering not only employment status but also the specific content of the ideal self and the ideal self as portrayed by others that mothers hold, as well as the impact of their discrepancies with the actual self, when evaluating maternal psychological well-being.

Summary of the Dissertation Evaluation

The public presentation of this dissertation was conducted online via Zoom on January 16th, 2025, from 16:30 pm for one hour, including a question-and-answer session. The public presentation was attended by approximately 10 participants, including three committee members, faculty, students, and graduate students. During the question-and-answer session, there were many questions from the audience, including graduate students, leading to an active discussion. Following the public presentation, an oral examination with the committee members was conducted for approximately one hour. The details of the examination are provided below.

This dissertation examined the impact of the discrepancy between the ideal self and the actual self on the psychological well-being of middle-aged mothers in Japan. While previous studies have primarily focused on younger mothers, this study specifically targeted middle-aged mothers and explored the relationship between self-discrepancy and employment status. Based on Higgins' (1989) Self-Discrepancy Theory, Study 1 analyzed the ideal self that mothers aspire to become, as well as the ideal self perceived from the perspectives of others, including their children, spouses, parents, and society. Mothers freely described their ideal selves, and the collected text was analyzed. The results suggest that the composition of the ideal self differs depending on the mother's employment status. Previous research has analyzed the relationship between the degree of self-discrepancy and psychological measures such as self-esteem. However, the ideal self that a mother envisions varies among individuals, and these ideal selves are influenced by the expectations of significant others and social factors. This study is novel in that it allows mothers to freely describe their ideal selves and analyzes the composition of both their ideal self and the ideal self from the perspectives of others. Furthermore, the findings suggest that the ideal self of mothers varied according to their employment status and is influenced by their spouses and parents, highlighting its academic significance.

In Study 2, the effect of self-discrepancy on mothers' psychological well-being was statistically analyzed. The results indicated that mothers with full-time employment exhibited significantly higher subjective well-being compared to those in non-regular employment. Additionally, regardless of employment status, a greater discrepancy between the ideal self and the actual self predicted lower subjective well-being.

These findings suggest that mothers' subjective well-being is associated with the discrepancy between their ideal self and actual self, emphasizing the importance of evaluating this self-discrepancy rather than focusing solely on employment status when considering mothers' psychological well-being. The study provides valuable foundational insights into understanding the psychological challenges faced by middle-aged mothers, which have been largely overlooked, and

contributes to the discussion on appropriate social support. Therefore, all committee members of the dissertation unanimously concluded that this dissertation demonstrates the academic quality of the author, Choi Fong Lee and that she is s deserving of the degree of the Doctor of Philosophy.